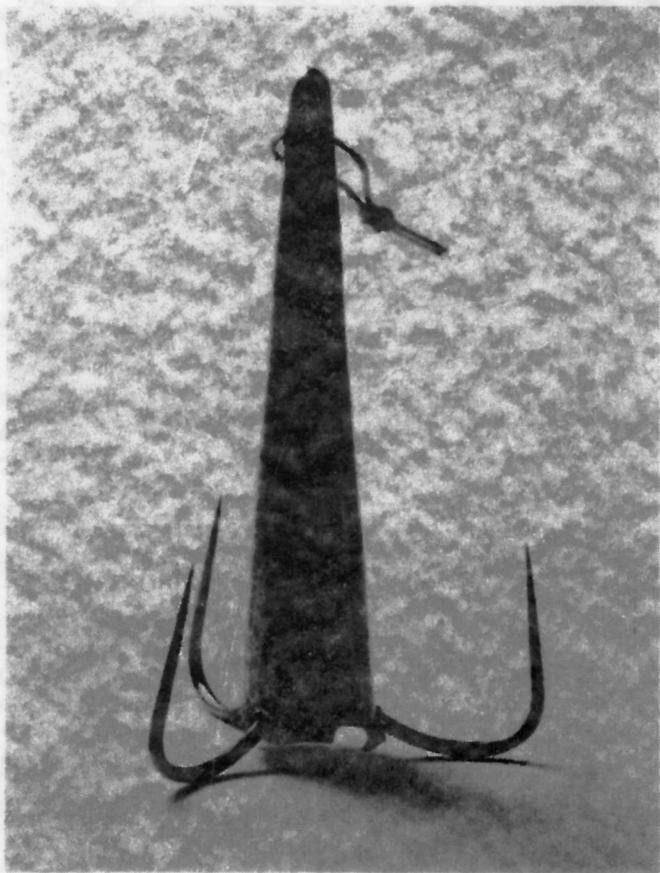


釣り文化

12₁₉₈₃



釣り文化協会

伊豆狩野川の鮎の友釣り技法の伝播

——狩野川技法の特長と伝播の要因—— (二)

常盤茂雄

はじめに

明治末のことである。友釣りを職業とした伊豆狩野川の一
人の釣師が利根川に入った。この釣師は、利根の川と人にと
魅せられて、以来二十年間ひたすら伊豆から利根へ通いつづ
けた。この釣師の名を鈴木久吉という。

しかし、一九二六年（大正十五年）、片品川の水が取られ
岩本に取水堰が出来たとき奥利根は滅びた。この釣師は、再
び奥利根を訪ねることはなかった。

利根の友釣りの歴史をひもとくとき、鈴木久吉こそ近代友

釣り技法を利根に伝えた先進者であることを知るであろう。

一九二九年（昭和四年）、伊豆の釣師が利根に土屋嘉一を
訪ねたとき、奥利根の釣師は口々に鈴木久吉の安否を尋ねた
と言う。

しかし、今六十年前の奥利根の川を語ることでできる古老
は少ない。まして鈴木久吉の名を知る利根の釣師は皆無にな
ってしまった。

わずかに残された鈴木久吉および土屋嘉一の足跡をたより
ながら、独野川の近代友釣り技法が利根川へ伝播されていっ
た過程を述べてみた。

狩野川の釣師、鈴木久吉

鈴木久吉は通称・鈴久、の名で通っていた。一八七六年（明治七年）十月十一日、伊豆狩野川中流域の左岸にある、昔から鮎漁の盛んな、今の静岡県田方郡修善寺町小立野の農家の長男として生まれた。水田一反、畑三反の田畑と小作地を借りた自小作農家で、養蚕をしながらどうにか食えるだけの百姓だった。

学校は今の小学校に当たる村立の本立学舎で幾年か学んでいる。軍隊に行かなかった鈴久は、親から受け継いだ田地畑を守りながら、農閑期には日雇いででて日銭を稼ぎ、夏と



鈴木久吉氏

もなれば川に行つて友釣りで鮎を獲り暮しの足しにしていた。

鈴久の長男茂作氏（八十歳）は、「親父は小作百姓でろくな百姓ではなかった、働きの百姓だったら日から一日中毎日川にばかり行くわけがねえ、百姓はすべておふくろまかせだった」と。

狩野川漁協の組合長を務め、自らも狩野川から初めて美濃長良川へ商売に出た飯塚利八（九十二歳）は、鈴久の釣技と人柄についてこう語っている。「鈴久は一風変わった釣り方をした人だった。深川淵を重い錘オモリを付け大鮎を掛けたり、人の入れない荒瀬に入つて釣つた人で私も一緒に釣り合つたこともあつた。技術は大変うまいという程のことはなかったし、鮎もそれ程多く獲つたとは聞いていない。しかし人柄は温厚でぐいぐい人だった。休みどきなどわざわざ雑貨屋から駄菓子を買つてきてよく喰わせてもらった。当時は鮎を釣る釣師はひと癖もふた癖もあつて、酒を飲むとすぐ言い争いをしたが、鈴久さんはそんなことは一度もなかった。だからも好かれていた。」

一九〇〇年代（明治三十年代）に入ると狩野川の鮎は東京市場と結ばれ、需要は高まり鮎の仕切値も上昇していった。釣りは道楽どころか、諸職の日当の三倍から五倍もの稼ぎの出来る商売になつていった。

当時狩野川の鮎が東京市場に出荷される経路は、仲買人によって集荷されるか、直接職漁者が地区や仲間内の鮎を集めて出荷するか、二つの方法がとられていた。腕のたつ釣師は仲買人の中間搾取をさらって直接出荷の方法を選び、東京の鮎問屋に直送していた。

東京日本橋には地方からの鮎を受け入れる鮎問屋が幾軒もあった。鈴久も、小立野地区の釣師の鮎を集め、日本梅の鮎問屋「大力」や「大榎」に送っている。当時のことを長男茂作氏は、「私の子供の頃、親父はよく鮎を積んだ大八車を三島の駅まで引いていったことを憶えている」と。仕切値の精算は十五日に一度送られてきたが、仲間内に金の必要が出来たときなど「大力」や「大榎」に向いて用をたしたり、ときには問屋から呼ばれて行ったりもしている。

問屋との付き合いを通して、鈴久は狩野川以外から集められた鮎を見る機会もあったろう。武洲の荒川、相洲の相模川開通したばかりの信越線で送られてきた信洲信濃川本支流の大鮎、上洲利根川筋からの大鮎と、鈴久の目は、大きく他国の川へと開かれていった。問屋に、八月も半ばを過ぎれば友釣りの鮎にまじって各地のやな場から集められた鮎も続々と入荷してきた。大型の鮎を見ることでその川の大小や川相も知ることが出来たし、友釣りで掛けた大鮎の魚体を見ながら釣り傷があっても尻鰭が裂かれていないことを見とり、この

仕掛けが狩野川の技法から見ればひと昔前の仕掛けであることも瞬時にわかったことだろう。

いつの日か他国の川へ行ってみよう、今の稼ぎより二倍、三倍もの稼ぎになるかもしれない、自分の腕がどこまで他国で通用するか。鈴久は、そんなことを考えたにちがいない。

他国に向かわせた大洪水

一九〇七年（明治四十年）、鈴久はもう三十一歳になるうとしていた。

狩野川での稼ぎは自分の技術と体力とに見合うもので、抜群の水揚高とはいえないまでも、諸職の倍以上の日当にはなっていた。地元で商売になるのにとさら他国へ出る必要を感じなかったし、何より一本竹の延べ竿がようやく継ぎ竿に変わろうとしていた当時、継ぎ竿といっても一本が八尺も九尺もの長物で、到底汽車電車で運べるものではなかった。匣箱から通い筒、川の中で釣るためには引き舟も必要になってくる。小道具から幾日も宿に泊るとなれば、着替えも用意しなければ、万が一、獲れないとなれば宿賃のことも頭に入れておかなければなるまい。次々に浮かぶそんな難問に、すぐ二、三年の年月が経っていった。

狩野川は、一九一〇年（明治四十三年）八月七日からの降雨と暴風とで大洪水となった。この台風について、修善寺町

に隣接する大仁町（旧田中村）の大正二年刊の村誌は、その時の模様を次のように記録している。

「七日ヨリ降り出シタル雨ハ愈十日ヨリ暴風ヲ加ヘテ洪水トナリ連続十二日至ル狩野川堤防ハ殆ント全部欠潰シ深沢川又々破壊シ田京西川戸ニ於テ家屋流失一戸破壊五戸アリ其ノ他浸水床上八十二戸床下四十八戸納屋其ノ他六十五戸貧困ニシテ給与を受ケタル者三十三戸……」ちなみに当時の大仁町の総戸数は八一二戸であった。

この台風で、梅雨も明けいよいよ本格的な釣り期を迎えようとしていた狩野川の鮎は、壊滅的な打撃を受けたのである。職漁者にとって、この年の鮎漁はもはや期待出来なくなつてしまつた。

佐藤拓石氏は、「明治四十年前後であつたと思う。偶々、伊豆の狩野川の職業漁師が利根川の豊漁を伝えきいて、遠征してきた。」と『つり姿』（昭和十七年、鶴書房）に書いているが、利根川のはとりに生まれ育ち、大正年代の後半利根川上流、綾戸、岩本、戸鹿野、後閑の友釣りに魅せられ通い続けた拓石氏には、利根の名人房吉や茂市との交遊を通して伊豆の釣師や土屋嘉一との出会いもあつたと思う。

「明治四十年前後」という記述は、鈴久のことを考えると極めて気にかかる。

何より当時の狩野川の実情のなから他国へ商売にでいく必要性を考へるなら、この大洪水こそ、鈴久をして清水の舞台から飛び降りる気持ちで他国への商売に踏みさらせたのではなからうか。

久吉、利根へ行く

幾人の仲間と連れだつたのか、確かなことを伝える資料はないが、鈴久と利根に通つた釣師の名は伝えられている。小立野の鈴木平吉、中島伍作（城泉）、中島信男（後水口姓）土屋嘉一、修善寺の植田友平、遠藤八作、遠藤晴吉、河津、湯ケ野の板垣興平である。

茂作氏は「親父は初め信濃川に行つて、雨で釣りにならないので利根川に入ったと聞いている。……竿は三本継ぎの間から四間一〜二尺ぐらいの竿だつたから、初めのうち竿だけ鉄道便で送つていた」と語っている。

信濃川のどこへ行ったのか、竿をどこへ送つたのか、もうそれをたずねるすべはない。

利根川は大河であり大鮎が出ることは鮎問屋を通して鈴久は知つていた、たゞ友釣りが出来る釣場、そこまで行く道筋は容易ではなかつたはずだ。

茂作氏の母親は、「蚕を売つた金をふところ利根に行つた」と言う。連れの仲間も恐らく前借りしたりして路銀を作

つての同行だったろう。

信越線、高崎駅からは前橋を通って利根川上流の渋川まで上毛馬車鉄道が開通していた。吾妻川を合流した利根川は優に狩野川の二倍から三倍の水量を持つすさまじい流れである。鈴久は、驚きと言ひ知れぬ興奮をおぼえながらも、友釣り師の直観で、この上流に大石と巨岩とが続く尺鮎の釣場があると察知するのだった。

行けるだけ上流へ行こう。竿は馬車鉄道にくくりつけて、鈴久が終点の渋川に降り立ったのは一九一〇年（明治四十三年）八月中旬の日だった。

利根川、友釣りの模様

ここで利根川の友釣りの歴史についてふれてみよう。

利根川の友釣りの始源については『阿左見日記』（一九八一年八月発行、沼田郷土研究会）の中で、弘化二年（一八四五年）の頃に「利根川ニ於テ鮎ツリ始ル右ノ儀ハ同国桐生辺ニテツル風聞有之」

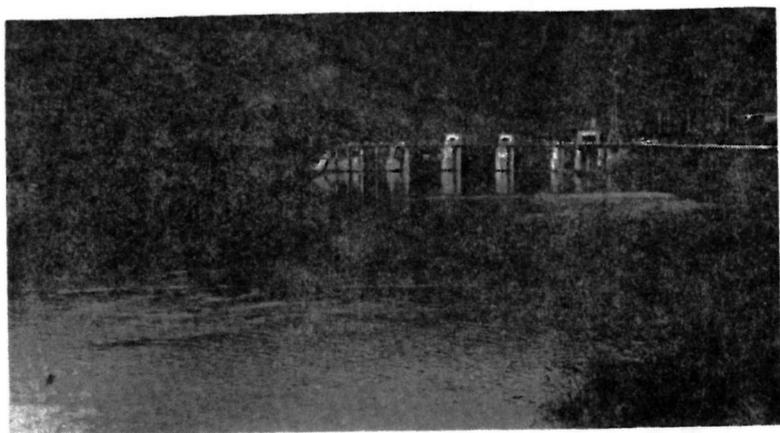
右二付 沼須村 金子豊吉始ル 年二十才 弘化三年ニ至リ桐生ヨリ名人来ル」と記述されている。

「鮎ツリ始ル」について『阿左見日記』の発掘者であり編集者である桑原健次郎氏は、「アユ釣りはなにもこの年から

始まったというのではなく、ここで述べているのはアユ「友釣り」の技法伝授をさしているのでしょう」とNMK『趣味の手帳』（一九七八年三月発行）の「釣りと私」の中で指摘している。狩野川の友釣り始源から約二十年後のことである。また、桑原氏は奥利根の友釣りについて、一八八五年（明治十八年）清水峠に道路が開通し、祝賀のため北白川宮や山県有朋が馬車や人力車で大峯新道を北上してきたとき、その旅情をなぐさめる趣好として、友釣りの実況を見せることになったが、「釣師は普段川では素裸で釣りしておりますが……」と恐れながら申し上げるよ、「普段のままでもよろしい」と言うことで、実況したと古老の話を伝えている。

渋川には、鈴久の足跡は残されていない。しかし、西も東もわからない鈴久等はここで何日か逗留しながら、川の状態上流部への交通、鮎の売り値等の知識を得ながら、利根川釣師の技法を直接見ることも出来ただろう。

だが、鈴久等を容易ならざる技法を持った釣師であると、利根でだれよりも早く理解したのは鮎仲買人であったろう。一日目、二日目、三日目と夕方になれば一人一貫目を下らない鮎を持ち込んできたからである。当時わが国屈指の保養地伊香保、草津の温泉場と前橋の市場を持った渋川の鮎仲買人は、驚喜し鮎をどんどん受け入れながら、鈴久等と買い入れ契約を結んで、新しい情報を知らせ合ったに違いない。鈴久



昔の利根川の川幅に近い利根川
上流・岩本にある発電用水堰

等も仲買との契約を結ぶことで安心して利根川での商売を続ける立場が確保出来たのである。

川の状態、鮎の魚体の大きさ、釣場の状況を知ると鈴久等は渋川より上流今の上越線岩本駅附近へ移ってくる。

猫瀧の荒瀬から綾戸、中河原の峡谷に入るあたりの釣場の風景を佐藤垢石氏は次のように記述している。

「ほんたうの尺鮎が釣れたのである。

水量は多く川幅は広く、瀬は荒い。非力の私できへ五間半

の長竿を使はねばならぬのであったが、体力のある職業釣師は六間半以上、七間など、いうべら棒に長い竿を振りまわしてゐた。そんな竿でなければ屈かないほど遠い流心に、大きな鮎は石の垢を食つてゐたのだ。」

岩本を過ぎると片品川が合流する。ここで湖上してきた鮎の群はふたつに分かれ、右へ行く群は片品川に、左へ行く群は本流を溯っていく。

「利根川は、次第次第にバクをなして奔下する水貌だ。戸鹿野橋や杉山下。次いで曲つ瀧、曲つ瀧は、大利根百里の全川中、随一として指されてゐるところの難所である」

鷺石橋から沼田を過ぎ、薄根川の合流点から間庭を通れば後閑地先である。

「下総の銚子にある利根河口からこゝまでは、八十里もある。——長い長い旅路を経て、後閑まで達するには、もう夏の土用に入ろうとする七月中旬だ。——鮎は頑健そのものになつてゐる。身の上八、九寸、四、五十匁から百匁近いまで育つてゐる」と（『つり姿』から）

鮎を釣る鈴久の姿

岩本には近郷近在の腕スキの釣師が集まり、川沿いには二軒の旅人宿と釣師相手の飲み屋も店を開いていた。

鈴久等は旅人宿の一軒、小川屋に宿をとって、周辺の釣場

をつぶさに見ながら、河原が広く、宿からも、道からも数分で川に出られる岩本こそ奥利根での友釣りの中心であり、長い逗留にふさわしい場所だと理解するのだった。以後小川屋は一九二六年（大正十五年）まで伊豆の釣師の定宿になっていく。

小川屋に落ち着いた鈴久等は本格的に釣り商売に打ち込んでいった。

頭に日よけ^{カマ}暈、薄手のシャツと脛上までの白木綿のもも引をはき、うちふところ仕上砥石を入れ、足半の草鞋を付けて、腰に巻いた大紐には竹筒の引き舟が張られ、手網の柄がきつしりと背中に差し込まれている。竿は細身の三本継ぎの四間一尺物を持った狩野川の釣り姿。

地元の釣師は全身赤銅色に日焼した身体に日よけ暈、腰紐に引き舟あとは何もつけない素裸で、四間近い太身の一本竿を持って激流の中で釣っている。

地元の釣師には、鈴久等がたかが素人としか映らなかったに違いない。だが、ひと度竿を合わせたとき、信じられないことが起こった。

今の今まで自分達が釣って掛からなかった場所で鈴久等は次々に鮎を掛けているではないか。移動すれば入る。決して地元釣師の先を越すようなことをしないで鮎を掛けていく。

職業釣師にとってこれ以上の屈辱があるだろうか。岩本地

先で引く釣師は利根で屈指の釣師と言われている。そんな誇りが音もなく崩れていく思いをこらえながら、彼等に掛かって俺に掛からぬはずはないと、いつ気にも入らなくなった。鈴久は静かに竿を立て、罎を手許に寄せながら、釣師に道をあげ水際にさがり石に坐って、ハリスの乳輪をはずし小さな仕上砥石を出して伊豆鉤の鉤先を研ぎつけた。流心近くまで沖に出た釣師の上半身には激しく水しぶきが当たり、その姿には強い気魄がこもっているのを鈴久は感じた。鈴久は立って釣師の上手から罎を放した。研ぎすまされた鉤を付けた罎はグイグイと荒瀬に入っていく。罎が釣師の足もと近くに行ったとき、竿先が激しくあおられた。瞬間、竿を斜め上方に倒した。強い引きが腕から全身にしびれるように伝わってくる。二歩三歩後ずさりしながら竿を更に上流にねかせ速い動作で野鮎を引き寄せ。すぐ掛けた野鮎に鐘木を通し尻鰭に二本の伊豆鉤を引き通し、間髪入れずに送り出した。罎が竿いっぱい跳んだかと思つた時、目印がふあーとよじれた、きつた。二尾の鮎はいっ気に流心を横切つて疾走していく道糸も切れよとばかりの引きだ。ピューピューと糸鳴りが瀬音をかき消して鈴久の耳に入ってくる。飛ぶように瀬を駆け降つて手網に入れた鮎は六十匁を下らぬ鮎だった。

三尾目の鮎を掛け、手網から引き舟に入れたとき、釣師は罎を引き寄せ、鈴久の後を回つて立ち去ろうとしていた。ふ

と二人目が合った。鈴久が軽く頭を下げると、「何処からこられた？」と言葉が返ってきた。「伊豆から」と応えてもう一度頭を下げると、釣師は何も言わずに通り過ぎていった。

屋前には鈴久の罔箱には二十尾近い大鮎が納まっていた。地元の釣師が鈴久の三分の一の鮎すら掛ける者はいなかった。夕方になれば、鈴久等は一人一貫目から一貫五百匁の鮎を渋川に仲買人に渡していた。挑戦してくる腕ききの地元釣師など鈴久の足下にも及ばなかったのである。

鈴久等は九月中旬まで奥利根の鮎を釣って釣って釣りまくり、ついには河原で鈴久の姿を見ると、地元の釣師は釣場を捨てて移動するまでになつてしまった。

新しい年に向かつて

日が短くなり河原に秋風が吹き始めると、鈴久等は重い財布を懐に入れ狩野川へと帰っていった。

四十匁五十匁の鮎を四、五百尾も掛け、さらさのようになつている竹竿を見ながら鈴久は、利根川での釣か思った以上に魅力ある商売であることを知り、十月に入ると腰が強く穂持がしっかりした伊豆竹を探しに山に入って、親子の竹を伐り翌年への備えを始め、歳が明けた三月には暇をみては竹竿作りに専念した。少しでも長く、持ち疲れしない軽い竿、管継ぎの三本から四本継ぎの発想も利根川の釣りから学んだ貴

重な経験だった。

四月の末になると、きまつて沼津の我入道から釣道具を風呂敷に入れた、小島という人が小立野の釣仲間の家を回ってきた。本テグスの一厘から二厘まで、鉤も伊豆鉤の九分と寸を充分仕込み、鐘木は木綿針をローソクの炎でもどして作り、錘も一匁から五匁まで鑄型を造って、葉書を間に入れ鉛を流し込んで作つたりもしていた。

鮎漁も始まり狩野川での友釣りも一段落した頃、渋川の鮎仲買から利根川の友釣りが始まつたと知らせてきた。

その声を守っていたかのように、鈴久は小立野の鈴木平吉修善寺の遠藤八作、植田友平等四、五人を連れて岩本の小川屋に直行した。昨年同行者探しの苦勞が嘘のように思えてくる。鈴久は、利根川での教訓から、同行する人選びは何より狩野川で中級以上の腕を持つ釣師で、酒は飲んでも土地の釣師や宿の者といさかいを起こさない気心の合った釣師を選んできた。年令も三十歳代から四十歳代である。

「伊豆の釣師来たる」の報は、またたくまに利根に広がつていった。

利根川釣師らとの交流

岩本の下流、綾戸の荒瀬から、岩本地先、片品川の出合から戸鹿野と好調な漁を続けていた。

その日は、朝方から降り出した雨が本降りになって、鈴久等は久しぶりの休養を仕掛作りや竿の手入れをしながら宿で過ごしていた。そこへ宿のお内儀さんが「地元の釣師が皆喜んで会いたいそうです。」と取り次いできた。見れば、その中の一人の顔にははつきりと見覚えがあった。三十五、六になろうか、昨年戸鹿野の下流で顔を合わせ声をかけ合った、あの顔。一升徳利が二本、鈴久の前に置かれた。

やっぱり来たか。やがて、見覚えのある釣師が半紙に包んだ品を鈴久の前にひろげ、「この仕掛けは私共の使っている利根川の仕掛けです。もしよろしかったら伊豆の仕掛けをぜひ教えて欲しい。」と正座しなおし、つぶやくように話してきた。

鈴久は、その仕掛けを手に取り仲間に見せながら、「この仕掛けではわし等も一日五百匁の鮎は釣れない。」と言い放った。

その仕掛けとは、「日本魚類図説」のものも(前回の第二図)と基本的には同じで、利根川仕掛けは二本のハリスが道糸からでなく鐘木から出ている違いだけである。錘は五〜六匁の銀杏形の中通しに木栓がつき、ハリスは馬素の三本縊りに袖型の八分ぐらいの鉤がついた、吹き流し仕掛けである。

川を離れた鈴久の目は柔和で親しみがあつた。鈴久は伊豆の仕掛けと利根の仕掛けとを釣師達に見せながら、利根の仕掛けの致命的な弱点は罟を追った野鮎を完全に捕捉出来ない

点にあるとして、野鮎が罟を追う視点や姿勢を狩野川での「見づり」の経験を交えて話し、その障害で馬素の三本縊りにあること、それを本テグスに変えて尻鱈に通すことで、鉤は固定され追ってくる野鮎を鉤が確実にとらえることが出来る」と説明した。二本の馬素ハリスは罟の泳ぎを悪くする百害あって一利もない、伊豆では今このような仕掛けを使っている釣師はいないと。そして、釣師間の競争の激しい狩野川の現況をつぶさに話すのだった。

利根の釣師等は、鈴久の道理にかなった説明と、初めて聞く他国の川での釣り技法の発展に目をみはり、利根川の技法が昔ながらの進歩のないことを知らされる思いだった。

幾組かの仕掛けを渡しながらか鈴久は、さりげなく「鉤は生命だ。」と言い、「この仕掛けは狩野川釣師の幾十年の研究から生み出されたものだ」とにっこり笑って釣師を玄関まで送った。

室に戻った鈴久は、仲間に「やがてはわかることだ、ただ一つだけ教えてないことがある」と言った。それは砥石だった。

鈴久が川に出れば地元の釣師は竿を置いて鈴久の釣り姿を喰い入るように見ながら、伊豆の技法を学びとっていた。

地元の釣師の間では、鈴久を「先生」と呼ぶ程の親近感を示すようになっていった。

この年利根川の友釣りは大きく変ろうとしていた。